

ライバル現る（古代史は面白い）

首藤 静夫

神武天皇の東征は水銀朱探しだったと僕は主張している。ところが、似た内容ながら神武の目的は鉄だったという論文をウェブサイトで見つけた。

著者は吉田敏明氏という元IHIの技術者。論文は当会の浅井壮一郎さんの著書からも多く引用されている。それに気を良くした。

日本の製鉄は一般に六世紀ころの開始とされる。鉄は自然界では酸化鉄の状態で存在するので、鉄に戻すには高温で原料を焼き、酸素を追い出す。これを製鉄ということになる原料は砂鉄や鉄鉱石だ。途中の過程で、フイゴ（送風器）や築炉などかなりの技術が必要だった。

古代の日本にはこの原料・技術がなかったため、先進地の朝鮮南部まで行って鉄素材を調達、それを国内で加工して農具や武器を作ったとされる。

これに対し氏は全く別の鉄原料を紹介し、神武はそれを求めて東征したと言う。それは植物の葦だ。葦の根元に付着し、化石化した鉄分が原料というから驚いた。四百度という比較的低温で焼いても鉄分が溶け出すという。実験に成功したという学者の論文も紹介、縄文人も知っていたはずというのだ。

縄文人は何故知ったか。葦を集めて焚火すると最後に黒いもの（鉄分）が残った、その利用価値が徐々に分ったのではと推測している。朝鮮半島の鉄より品質は劣るが装置は簡単で、より低温で鉄が取れるそうだ。神武一行は葦の根元に付着する鉄原料を求めて東征したと氏は主張する。

日本列島は湿潤で湖沼が多く、古代は葦が生い茂る地であった。日本の古名は「瑞穂の国」とも「葦原の中ッ国」とも。稲と葦は相性がよさそうだ。水田を拓くのに鉄製農具は重要だ。稲作の拡大とともに神武らは鉄で大儲けしたのだろうか。

ただ古代の製鉄遺跡が見つからないので未だ想像の域を出ない。私の唱える水銀朱説も同様であるが、水銀朱は採鉱跡や伝承が神武のコースに残されている分やや有利か。いずれにしても神武らは鉱物資源を探して東征したとする仲間がいるのは心強い。